

『色』というのは非常に重要だ。

人間は情報の多くを視覚で捉え、対象を色で認識する事も多々ある。チームを組んで戦うヒーローの例を見るまでもなく、差別化を図る上で、色が違うというのは効果的だ。ただ色を変えるだけで、『専用機』だの『限定バージョン』だのと、商品展開にも有効的に活用出来る……これは下世話か。

逆に、差別化を図るのではなく、あえて同じ色にする事で統一感を出す事も出来る。

スポーツチームやアイドルグループのユニフォームなどが、これに当たる。

これによって、ぱつと見のビジュアルが均一化される事で、より内面の個性を際立たせられる。

どちらが正解かはケース・バイ・ケースだが、どちらも有効な手である事に変わりはない。

つまり、色というのは重要だという話だ。

7 戦目

『彼女の和服が赤い理由^{わけ}』

目が覚めると——妹が猫耳メイドになっていた。

何を言っているか判らないと思うが、俺にだって判らない。それこそ、『俺の名前はたちばな橘アサト——』なんて書き出しを忘れるくらいに動揺している。

整理しよう。

目の前にいる少女は、間違いなく妹のカナコだ。二つ年下の高校一年生……いや、今日は四月一日で入学式前なので、厳密には中学三年生なのか？

……四月一日？

なんだ、この違和感

まるで同じ一年を繰り返してるような感覚……。

「——兄さん？ 顔色が優れないようですが、大丈夫ですか？ ネコミミ、触ります？」

俺が誇大妄想じみた考えに陥おちいつていると、カナコが気遣うように顔を覗き込んできた。端正な顔が間近に迫る。艶やかな長い黒髪と、黒瑪瑙オニキスのような黒い瞳がよく似合う、いわゆる大和撫子。

それ自体は見慣れた姿だが、今日は見慣れないパーツが付属している。

そう——ネコミミだ。

本物と見紛みまがう質感で、手を触れていないのに動いている。少し緊張気味のカナコの表情と連動するように、びよこびよこ……。

見慣れないのはそれだけじゃない。

前述のように、メイドなのだ。

いわゆるエプロンドレスではなく、和服にエプロンという、割烹着かっぼうぎを彷彿ほうふつとさせる和風スタイルだが、黒い和服に白いエプロンとヘッドドレスという組み合わせは、どう見てもメイドだろう。

完全に猫耳メイド。

ずっと兄妹として過ごしてきたが、実は妹は魔法の国のお姫様で、赤ん坊の頃に俺の両親に預けられたとか、そういう設定だったのだろうか……？

メイドっぽい服だから使用人とは限らない。メイド服風の魔法少女だって今は普通にいる時代なのだから。

「……………あんっ」

「——ッ!？」

気を落ち着けようと、提案に甘えてカナコのネコミミに触れると、艶っぽい声が漏れた。

女の子の嬌声きょうせい、しかも相手が実の妹となると、その背徳感せいとくかんは半端じやなく、未だ寝ぼけていた俺の意識は急速に覚醒した。

「や、すまん！」

慌てて妹のネコミミから手を離し、謝る。指先にはほんのりと温もりぬくが残っている。

「いえ、私が言い出した事ですから、兄さんは気にしないでください」

声が漏れた事が恥ずかしいのか、カナコは頬ほおをわずかに赤く染め、照れたように言う。とりあえず、目の前の少女が妹のカナコである事は間違いないらしい。

「おはようございます、兄さん」

「うん、おはよう。えっと……何から突っ込めばいい？」

兄の目から見ても美少女としか思えない整った容姿に、思わず見とれてしまうような微笑を浮かべ、朝の挨拶をしてくれる妹に、俺はそんな言葉を返した。それはそうだろう。

妹は昨日まで、ネコミミもなければ、和風メイド姿でもなかったのだから。

「あ、そうですよね。実は私——看板娘になりました」

「……………」

「兄さん、毛布を被らないでください！」

「俺の妹が訳の判らない事を言っている。これは夢だ」

「すみませんでした！ちゃんと順を追って説明しますから！」

現実逃避をする俺に、カナコは珍しく慌てた様子で言った。



布団を出て、部屋着に着替え、リビングに移動すると、其処そこにはメイドがいた。

しかも、五人も。

「ようやく起きたか、アサトよ」

一人は黒い髪をポニーテールにした、五人の中ではもともと長身の少女。プロポーションという意味でも一番だろう。ゆったりとしたメイド服を着ていても、抜群たまたずのスタイルは一目瞭然で、正直、健全な思春期男子には目の毒だ。古風な口調と、凜とした佇まいたたずによつて緩和されているが、そうでなければ妙に緊張してしまうタイプだろう。要は美人なのだ。

流遠るしおヤミヒメ。

俺とカナコにとっては親戚で、現在は同居人である。

「おはよう、お兄ちゃん。本当はわたしが起こしてあげたかったんだけど、ジャンケンで

負けちゃって……ねえ、明日は起こしてあげたいから、今夜は一緒に寝ていい？」

続いて甘えるような口調で言ったのは、茶色のショートヘアに、猫のような雰囲気の小柄な少女。今年から中等部に入学という年齢なためか、無邪気な言動が目立つ——が、その無邪気さがどこまで本当なのかは判断が難しい。自分の幼さを武器として使う事を知っているのだ。あざといというか、小悪魔的というか……。

流遠ベアトリーチェ。

苗字が示す通り、ヤミヒメの妹である。

「猫耳メイドの可愛い妹に起こしてもらえるとか、ラノベですか、ラブコメの主人公気取りですか、とても羨ましいのでカナコさん、明日は私もお願いします！」

……途中から俺に向けた言葉ではなくなっていたが、そう言ったのは、緩やかに波打つ銀髪の少女だった。伶俐で神秘的な雰囲気纏ったクールビューティといった印象なのが、その実態は可愛い女の子が大好きな百合っ娘であり、俺に対しては平気で毒を吐く困ったちゃんだ。可愛く言ってみたが、恐らく残念度は変わっていない。

流遠タオエン。

流遠三姉妹の次女だが、何か決め事があるのか、自己紹介などの際には末っ子のベアトリーチェが先に行く。

「お邪魔しています、お兄さん。いけませんよ、ちゃんと自分で起きないと」

これまでで一番落ち着きのある声だが、俺の耳朶を打つ。責めるようなニュアンスではなく、澄ました表情を浮かべ、くすりと笑う少女は、しかしこの場でもっとも幼い容姿をしていた。なにせ今年で小学五年生。ベアトリーチェよりも幼い。なのにも関わらず、その大人びた雰囲気は堂に入っており、子供が背伸びをしている感はない。

高千穂ツバキ。

大人びているのは性格だけではないのだが、デリケートな問題なので俺からは言わないでおく。なお、彼女は我が家の同居人ではない。

彼女等と、先にリビングに来ていたカナコの計五名が、前述の通りメイドの姿をしている。ただし、スタンダードなエプロンドレスは流遠三姉妹のみで、カナコは目覚めた時に見た黒い和服、ツバキは色違いの赤い和服に、それぞれエプロンを付けており、頭に着けたヘッドドレスも共通している。

「……メイド喫茶でもやるのか？」

結局、カナコはあの場で猫耳メイドの説明はせず、リビングに来てくれと言われたのだ。俺がそういう推理に行き着くのは当然だろう。

「うむ。実はな——」

俺の疑問に、ヤミヒメが代表して答えてくれた。

要約すると、何かの店の手伝いをする事になり、メイド服は制服らしい。

要約しすぎと思うだろうが、雇用主も雇用形態も業務内容もよく判らないため、俺は途中で完全に理解する事は諦めた。ただ、犯罪の類でない事だけは確認したので、まあ、問題はないだろう。タオエンとカナコがいれば、間違いは起こるまい。

ちなみに、ヤミヒメとタオエンはロングスカート、ベアトリーチェはミニスカートで、それぞれ良く似合っている。ツバキくらいの年齢だと、和服は七五三のようで微笑ましく見えるものだが、落ち着いた雰囲気と綺麗な黒髪のためか、怖いくらいに着こなしている。カナコも同様だ。

だが、全員が似合っているために、違和感も顕著に出してしまうのだろう。並んで立つ五人の姿に、はっきりと『気持ち悪さ』を感じた。それはドレスと和服の違いではなく——『色』だ。

「なんか、ツバキだけ浮いて見えないか？」

そう。ヤミヒメ、ベアトリーチェ、タオエンはスタンダードな黒いドレスと白いエプロン。カナコも黒い和服と白いエプロン。ツバキもエプロンは白いのだが、和服が赤のため、明らかに彼女だけ浮いて見える。

ドレスと和服の違いは、共通のエプロンとヘッドドレスで気にならないが——実際、スカートの長さの違いも気にならない——一人だけ色が違うというのは、やたら気になる。やはり色から受ける視覚的な効果というのは大きいらしい。

「そうなんです。私に合うサイズが、この赤しかなくて。カナコさんには、合うサイズの赤い和服もあるんですけど……」

ツバキが申し訳なさそうに俺に言う。

「アンケートを取ったら、カナコは赤より黒が似合うっていう結果になっちゃって」

ベアトリーチェも困ったように教えてくれる。何処で誰にアンケートを取ったのかは、訊きたい気持ちをぐつと押さえてスルーした。

確かに、俺もカナコは赤より黒の方が似合うと思う。だが、逆にツバキは黒より赤の方が似合うだろう。サイズがないので、その選択肢はないらしいが、だからといって、このままツバキだけが浮いた状態でもいいとも思えない。

「それで悩んでる訳か」

「——いえ、私が赤い和服でツバキとお揃いにします」

俺が理解した瞬間、間髪入れずにカナコが言い切った。

……………。

え？ どうするべきか一緒に考えてくれって流れじゃないのか？

「あー……つまり、どういう事だ？」

なんだろう。今日の俺、理解が遅い子になってないか？

「どうもこうもありません。私は黒の方が似合うのなら、せつかくなので似合う方を見さんにしてもらいたかったです」

そう言うと、カナコは黒と白のコントラストが良く映える衣装を見せつけるように、俺の眼前に立ち、はにかむような笑顔で見上げてくる。

「俺に見せたくて、着て来てくれたのか」

「はいー」

今日のカナコは、珍しくテンションが高い気がする。というより、何かを期待してそわそわしている感じがする。

「そっか……うん、よく似合う」

そう言って、俺はヘッドドレスをずらさないように、カナコの頭を撫でた。このくらいの年齢になると子供扱いされているようで嫌がるものだが、俺の妹は未だに嬉しいらしいので、こういう時にはこうしている。

「……………にゃあ——」

くすぐったそうにカナコが漏らした吐息は猫のようで、目の前の猫耳メイドは和服な事もあって、猫又が化けているのではないかと思わせた。

「そのネコミミも制服の一部なのか？」

俺はふと疑問に思い、そんな質問をした。ちなみに、ツバキはウサミミ——バンナーガールのような兎の耳うさぎを付けている。雇用主の趣味なのだとしたら、相当なものだ。

「はい。カチューシャなんですけど、脳波に反応して動く優れものです」

カナコの言葉を証明するように、頭部のネコミミが動く。

「……待て。つまり作り物だよな？」

「そうですよ？」

当たり前じゃないですか——そんな表情を浮かべるカナコ。それはそうだ。まさかネコミミを移植まではしないだろう。そんな事は俺だって判る。

「じゃあ、なんであんな声が出たんだ」

まだ寝起きで頭が働いていなかった時、カナコのネコミミに触れたら艶つやっぽい声を出されたが、作り物なら感覚はないはずだ。

「あれは……兄さんに触れられていると思ったら、思わずキュンとなってしまった——」

頬ほおを染め、もじもじと肩を揺らす妹のネコミミは、恥ずかしそうに。たとんと閉じていた。



Mission complete

つまり、感覚がないにも関わらず、ネコミミに触れられている感触を想像してしまったという事か……。

「兄さんが望むのでしたら、家でも猫耳メイドになりますよ？」

妹の感受性に呆れつつも感心していると、カナコは背後の四人に聞こえないように、俺の耳元で囁いた。

「もちろん、兄さん専属です——」

そう言うてはにかむ妹は、やはりどうしようもなく……可愛らしく見えてしまった。

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』七戦目をお届け致します。

おかげさまをもちまして、本日で新サイトになって三周年を迎える事が出来ました。こうして続けていられるのも、読んでくださる方がいてこそです。反応がなければ、こんな風には続けられないものです。いや、本当に。

内容については、カナコが看板娘に就任しました。なので、看板娘全員登場ですが、メインはカナコです。前はタオエンが挿絵でしたが、カナコの出番も多く、他の看板娘が推しキャラの方には、ちょっと申し訳なくも思っています。

当然ですが、全員可愛いです！

カナコの看板娘の制服の色を悩んで、ツイッターでアンケートを取った結果、黒が百パーセントでした。ですが、結果的に赤にしたため、黒もお披露目したいと思い、こういうお話になりました。

ちなみに、ツバキとカナコのケモミミは作り物ですが、ヤミヒメとベアトリーチェとタオエンのは本物です。そこそこよろしく夜露死苦！

それでは、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

『ソイヤミ』も再開しますので、そちらをお待ちくださっている方は今しばらくの辛抱を………すいません！

2017/3/22 流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりよくせんっ！』ページに戻る